

令和4年度 第4回 小田原市社会教育委員会議 概要

- 1 日 時：令和5年2月27日（火）午後2時～午後4時
- 2 場 所：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、井上委員、齊藤委員、高橋大明委員、箕輪委員
- 4 職 員：鈴木文化部長、小澤文化部副部長、田村生涯学習課長、湯浅文化財課長、佐次図書館長、澤地スポーツ課長、濱野青少年課長、瀬戸スポーツ振興担当課長、吉川健康づくり課副課長、加藤教育総務課副課長、蓑宮生涯学習課副課長、藤澤生涯学習課副課長、遠藤生涯学習課副課長、町山人権・男女共同参画課係長、清水健康づくり課係長、三浦教育総務課主査、藤平生涯学習課主査

5 傍聴者：なし

6 概 要

1 文化部長挨拶

鈴木文化部長から挨拶をした。

2 報告事項

（1）令和4年度主要な社会教育事業の結果及び予定について

資料1に沿って、生涯学習課、文化財課、図書館、スポーツ課、青少年課から説明。

【木村議長】今、小田原市も子供会が減ってきているが、行政としては、何かいいアイデアがないものか。

【青少年課長】昨年度までは、例えば夏休みにキャンプ等、スキルを持っている者を派遣して、少しでも保護者の負担を軽くする指導者派遣事業をやっていた。ただ、実際には、キャンプの企画そのものをするのが嫌という話もあり、実際にどういうサポートを市に對して求めるのかということ、聞き取り始めたところである。

【木村議長】子供会がなくなってもそれっきりのように見えてしまう。サッカーやソフトボールなどスポーツができる子はいいが、地域にはそれができない子どももいるわけで、それを置き去りにするのはおかしいと思う。もう少し行政も市子連も何らかの対応を検討してほしい。市子連という団体があるのだから、子どもをどういうふうに扱っていくのかを考えいく必要があると思う。

【箕輪委員】子供会は、やはり親の負担が大きいという理由がどうしても拭えず、なかなか入る方が少ない。逆に言うと、積極的な方は、だんだん学年が上がると子どもが興味を持ったスポーツの方に進み、子供会を抜けてしまう。そうすると、子どもが参加したくても、親が子供会に関われなくなってくると、単位の人数がとても減ってしまう。そのようなところは、連合の形でやっていくのも一つの手かもしれない。学校の役員と同じように、関わってくれる人を、この先どうやって見つけていくのか、関わっていく楽しさを伝えていくのかというのは、一つ大きな課題かと感じている。

【高橋委員】自分の子育て中に、単位子供会の会長をやったことがあるが、その時、同時に子どもが地元のサッカーチームにも入っていた。時代か、その方の人柄か分からないが、

そのチームの代表者が、「子供会や地域の行事には積極的に参加しろ」「サッカー休んでいいから行け」というスタンスだったので、うちの子は子供会へも積極的に参加できた。今は、どちらかというと逆に、学校休んでまでサッカーの試合に行かせたりする家庭もあるので、スポーツ団体との連携もあっていいかと思う。

【木村議長】スポーツができる子どもだったら、競技チームでやればいいが、そこへ入っていけない子は、どうでもいいのかと思ってしまう。市子連という上部団体があるのだから、そこがもうちょっと働きかけながら、行政だけでなく、皆がやっていかないと、多分ダメだと思う。だから、これから子どもをちゃんと育てていくなれば、やはり子供会があって、地域が一緒になって、皆で遊べるような雰囲気ができていかないといけない。子供会の減少は、どこかで歯止めをかけないといけないかと思う。

【齊藤委員】本当に木村議長の話はとても重要だと思う。子どもに優しいまちは、世界的にも重視されていて、子どものまちづくりが成功している町は、自治体のイメージアップにもつながる。子どもたちが地域を誇りにして行くというスタイルとか、中年層になっても子どもたちの体験が活かされるというのは、研究上でも立証されているので、とても重要かと思う。行事がなければ役が回って来ず、親からしてみると「良かった、今年も調整しなくて済んだ」となる。でも、それは面倒がなくなったと、人が関わらなくなったとが同時なので、それは子どもたちの引きこもりや、人と関わらない、地域に対する愛情がなくなっていくのは、本当に後からやってくることかと思うので、子どもを大事にしてあげる世界の促進というのを、大人が後押ししてあげる場作りは、積極的にして行くことが重要かと思う。

【木村議長】言ったからすぐできるものではないし、ただ、なくなるのを黙ってみているようではいけないかと思う。そこで、話し合いをして、何とか続けてもらいたいということ単位を自治会はやっている。別に行政が悪いと言っている訳ではなく、この辺で何か一つ考えてもらった方がいいかなということだ。

【井上委員】私の自治会でも子供会が年々減っていつている。そうしたところ、その地区のスポーツをしていない子や、土日何していいかわからない、居場所がなくなってしまう子の親同士が声を掛け合って、一つの子供会を作っている。自治会のエリアで縛ると子どもが集まらないことに気づいて、ある公民館を中心に、うちの学区内なら、どの地区の子でもよい、集まろうと声をかけている。習い事をしていない子とか、何かのきっかけに声をかけると、来てくれて、何度か来るうちに楽しくなる。機会あれば行くという段階が一つある。うちの学校で今回、コロナ禍で勇気を持ってお祭りをやった。外部団体、スポーツ少年団、バスケ、ソフト、サッカーなどの店を持ってもらって、それに加えて、その子供会の人たちにも店を出してもらい活躍した。

(2) 令和5年度予算概要について

資料2に沿って、小澤文化部副部長及び濱野青少年課長から説明。

(質問等なし)

3 協議事項

(1) 令和5年度社会教育関係団体への補助金について

資料3に沿って、生涯学習課、文化財課、青少年課から説明。

(質問等なし)

(2) 今期研究テーマの協議について

資料4に沿って、生涯学習課長からテーマ協議のねらい、進め方等について説明。

【有賀委員】協議結果をまとめる報告書の全体像が、どのようなものになるのか、イメージできる骨子案のようなものがあれば、示してほしい。

【事務局】 諮問を受けて答申を出すという決まった形式ではなく、来年度からスタートする教育振興基本計画を推進していくためのエンジンになるように、自由に様々なご意見を反映できるヒント・アイデア集のようなものを想定している。まとめる際には、デジタル技術の活用だとか、コミュニケーション不足の対策など、4つの考察ポイントを絡めた視点を込められたらよいかと考えている。

【笹井副議長】諮問・答申は、行政の責任者から諮問を受けて、それに対する行政施策をある程度具体的に書く必要があるが、建議や提言、報告というのは、もう少し自由にできる。テーマが大きくて重いので、具体的に書いたり、方向性を示したり、様々あって良いと思う。

【齊藤委員】第四期の小田原市の教育振興基本計画で示された提言、その上で小田原市の実態に対して、その不足部分を話し合っ、その上で新規の視点とか、方向性を話し合っっていく形で、現状・不足点・新規という部分の柱を立てて話した方が、最終的には作りやすいかと思う。

【笹井副議長】計画は、ある程度実現可能性というか、feasibility（フィジビリティ）を前提に作っているが、コロナ禍を経て「いったい社会教育どうなるんだろう」ということが、なかなか結論が出ないところがある。ただ、その中でも、ある程度、小田原らしい知恵が出てくればと思う。だから、基本的には計画を前提に、何が足りないとか、どの論点が必要だとか考えていくのが、今までのやり方だが、その方向性にこだわらなくてもいいかと思う。柔軟に考えて、少し計画に書いてないこととか、計画では示し切れてない方向性も含めて議論した方がいいかと思う。

多様性を認め合う学び

・多様性の理解と共生社会の実現

資料5に沿って、蓑宮生涯学習課副課長から説明。

【木村議長】「多様性を認め合う学び」というテーマがとても難しく、なかなか考えがまとまらないが、一つの事例として思いつくのは、富水小学校は県立支援学校の生徒と行き来があっ、いろいろな交流の機会を設けていること。これは、事情の異なるお互いを認め合うことにつながる好事例だと思う。

【笹井副議長】多文化共生や多様性を認め合うという話になると、様々な事柄、側面がある。男

女共同参画も男女の共生であるし、外国籍の人たち（子どもも含めて）との共生、障がいを持っている人たちとの共生等、いろいろな側面がある。例えば、東京都新宿区では、特に中国人、韓国人、ブラジルの人などが多いので、そこで「共生」というと、やはり“外国籍の人とどう付き合うか”という課題が中心になってくる。だから、小田原の場合はここに注目するというポイントがあってもいいと思う。

「多様性を認めあう学び」というものには、「共感」の部分が結構大事になってくると思う。理屈で「平等」や「尊重」が大切であると言っても、なかなか身につかない部分もあるが、相手が「こういう存在なのだから」ということを認識する、事実を知る、そこから生まれてくる「共感」のようなものがとても大事なのだと思う。

【齊藤委員】この教育振興基本計画の見直し作業において、結構議論されたのは、障がいを持っている子どもたちをどう認めるのか、学校に行けない子どもたちの居場所をどうするのか、外国につながる子どもたちの学びの場や、子どもたちの多様性の場をどうやって大人たちが守っていくか等の議論が中心だったかと思う。

コロナ禍もあり、今、人との距離感がすごく難しい。マスクを外して話しかけてくるのが気持ち悪い等、平気で皆言うので、そういうふうにならないように、お互いにお互いを認めるような共感力とか、人間関係の構築力というのは、まさに社会教育の現場において重要だと言われている。

「違っていても当たり前」を、どのようにすればお互いに気持ちよく共感し合えるのか、その上でどうコミュニケーションを取っていくのか、その訓練のようなものが必要な時代に入ってきていると思った。

子ども同士でも違って当たり前、外国人、障がいがあるというのも違って当たり前。その当たり前の状況について話をする中で、大学院生から「面白いね」という言葉があった。いろいろなハイブリッドな力量を持っていて「面白い人だね」と、お互いに認め合えるような、そういう環境を醸成して行くのがとても重要だという話が出ていた。逆に言うと、違いを「面白い」と思わないから、「画一」の方が良く、そこからはみ出して行く人に対して、「ちょっと変な人だ」という声につながってしまうことがあり得るかと思った。

この多様性が今「ダイバシティ」という言葉に変わってきていて、これまでは「男女共同参画」で推進してきたが、「ダイバシティ」に変わると、途端に範囲が広がってしまう。

性的マイノリティや、「さん」付け、「君」付けをどうするかとか、男女の区別のこととか、性を他の人に分かるようにしてはいけないとか、そのような問題が結構挙がってくるが、根底にあるのは、やはり人間関係性とか、この辺を社会教育の方へと寄り戻していくというのは重要かと思う。

【高橋大明委員】本校の場合、県のインクルーシブ教育推進事業に当たっており、多くの子ができるだけ自分の実態に合って同じ場で学ぶことができるようにしている。特別支援級で勉強することもあれば、個別支援員さんが付いて通常級の方へいって一緒に勉強したり、様々なところに配慮している。

やはり子どもは、自然というべきなのか、小さい時から学んでいるので、特別支援

級の子にも、外国につながりがある子に対しても、子どもたちの間では「垣根」がない。

やはり人権という部分では、まず「知る事が一番」というのは確かだと思う。知らなければ始まらない。

そういう意味で、講演会も大事だと思うが、同時に、交流型で実際に体験することで分かることは多いと思う。

例えば、県教育委員会のホームページで、人権の参加体験型学習というプログラムを作っている。話を聞くだけでなく、実際に隣の人と交流しながらとか、講師の人と仕掛けを作ったり、学校の授業と同じような感じでやっている。

ただし、大人数ではできないので、例えば、講演会の後に少人数に分かれてやるとか、あるいは大規模な研修会ではなく、小規模な研修会をたくさんあちこちで打つ方法もあるのかと思う。

【笹井副議長】東京都新宿区の例だが、新大久保には韓国の人がすごく多い。そこで、韓国料理の講座を韓国人に頼んで開き、日本人がその講座を受けに来る。キムチチゲとか、ビビンバをどう作るかとか、韓国の人から聞くことができる。そうすると、美味しいものができるので「すごいな」って、みんな素直に尊敬できる。ちょっと工夫すれば、面白い講座ができるかと思う。

【木村議長】支援学校との交流であったり、今の料理を元にした外国人との交流であったり、いろいろな機会を設けることができるように思える。

また、自分の地域の話だが、小学校5年で、支援学校へ行って交流する機会を経た子どもたちは、支援学校の多様な生徒たちと一緒にいる場面でも、違和感を抱く様子もなく普通に過ごしているように見受けられる。やはり、こういう交流が多様性を認識する一つになるのかと思う。

韓国料理の講座の事例など、それぞれの自治会でも、公民館を活用して何でも学ぶことも、ひいては多様性の理解につながっていくのではないかと思った。

【有賀委員】市民への人権教育の推進の基本施策のところで、「小田原市人権施策推進指針及び小田原男女共同参画プランに基づき…」というところを読んでいくと、最後に「関係機関や民間団体等と連携し」とあるが、具体的にどういう機関や団体が啓発活動推進に取り組んでいるのか伺いたい。

【町山係長】人権だと、小田原市人権擁護委員会や更生保護団体、男女共同参画についても、市民活動として男女共同参画に取り組むグループや、男女共同参画推進サポーターに登録されている団体・市民の方、そういうところと協力・連携している。

生涯健康であるための学び

- ・食育の充実
- ・生涯を通じた健康づくりの推進

資料5に沿って、蓑宮生涯学習課副課長から説明。

【木村議長】基本施策に「栄養バランスのとれた食生活の実践」とあるけれど、小田原では塩分のことをもう少し気にしないといけないのかと思う。神奈川県でも一、二を争うぐらいに、小田原では脳疾患が多い。

小田原の名産品が梅干しやかまぼこだから…という冗談半分の話もするところだが、食育の問題等、健康づくり課で様々な取り組みをやってくれているのは承知している。ただ、今までは、コロナ禍により、なかなか対面でやることができなかったと思う。

【笹井副議長】外から見ていると小田原には、とても豊かな食文化があると思う。この会議に参加した後は、大抵、小田原のかまぼこや干物を買って帰っている。これは、脳卒中になる可能性が高まるかもしれないけれど、とても豊かな食文化で、小田原の市民や子どもたちにその食文化を伝えていくのも食育の重要な仕事だと思う。

朝ご飯を食べて来ない子どもがいるとか、夜に脂っこいラーメン食べてしまうとか、夜遅い時間に食べるとか、おやつを食べて夕飯を食べないとか、食生活・食習慣の問題というのは、生涯学習でも問題になってくる。

朝ご飯を食べて来ない子をどうするのかなど、上手く改善できる方法を講じていくのが大事であり、学校、家庭、地域が連携しないと上手くいかないかと思う。

生涯学習として「食育」というのは、栄養バランスの問題が一番大きいですが、食と環境との関係という側面もある。「地産地消」という言葉がよく使われるように、地元にあるものを保存料など使わずに食べたほうがおいしいし、地元産業の活性化にもなる。環境への負荷も少ないし、消費期限とか賞味期限とかもちゃんと理解して、無駄にしないように食べるということ等につながってくる。地域、環境との関係というか、そういう視点も食育の問題で結構議論される場所だと思う。

そういうことを事業化するとか、市民に取り組みをお願いするとか、あるいは学校と連携するということができると良いかと思う。

【齊藤委員】来年度から神奈川大学の教養科目で体験型授業を小田原のフィールドを使ってやることになっている。「食育わくわく体験授業」という授業で、下中玉ねぎ、梅、みかん等の収穫やその活用などに携わることになる。「みかんクラブ」というボランティアクラブもできて、廃棄されるみかんを活用した流通について学生たちが考えている。

食を介したワークキャンプで、体を動かして健康になり、かつ、心身の健康につながっていく。食を介して体験が広がっていくということは、学校教育にない側面で、地域資源の活用ということにもなるので、すごく面白くできるのではないかと思う。それが結果的に、生涯健康というところに結びついているのかと思う。

【有賀委員】学校給食でも「地産地消の給食」ということで、小田原産の玉ねぎやかまぼこを使っている。今、子どもたちが黙食している姿は可哀想なのだが、やはり子どもたちにとっては楽しみであり、嬉しい献立なのではないかと思う。

今関わっている「子育て広場」では、玉ねぎの収穫体験イベントがある。子どもたちが、お母さんと一緒に参加して、近所の畑で玉ねぎの収穫をするが、地元の方が、ただ収穫するだけでなく、玉ねぎの種類や取り方、小田原の玉ねぎの美味しさなどの説明もしてくださる。子どもたちにとっても、お母さんにとっても、このような良

い体験はやはり必要かと思う。

現在の収穫体験については、以前、玉ねぎの収穫でお世話になった農業ステーションは、事情により開催できない状況にあり、昨年は近所の知り合いの方にお願ひし、自宅の畑で5月と11月に芋掘り体験をさせていただいた。今後も収穫体験イベントについては、自然との触れ合い、親子の交流を目的に、積極的に取り入れていきたいと考える。

【井上委員】「学校給食」が貴重な栄養源だと捉えているお母さんたちも多くいるのではないかと
思う。

本校では、PTAの行事として「給食試食会」が、3年間も実施できない状況にあるが、昨年は、給食説明会という形で、学校の栄養士の先生に「こうやって給食を作る、こんな給食をやっている」というビデオを用意してもらって募集をしたが、コロナ禍でなるべく人と会いたくないのか、なかなか人が集まらなかった。

早くコロナが5類になって、子どもたちがマスクを外して、おしゃべりしながら食べられるようになると、もっと給食が楽しくなるかと思う。

また、本校では、給食時間に栄養士の先生が、小田原の梅干しや食材に関するクイズをしてくれて、それを聞きながら黙々と食べるという工夫はされている様子である。

【有賀委員】主な取組の「地区活動の充実」のところで、健康おだわら普及活動とあるが、友人がこれに関わっており、何度か誘われて健康教育に参加したことがある。

この無関心層へのアプローチという課題解決のためには、4つの考察ポイントの中の、③「つながる学びの実現」を目指す必要があるか考える。友人同士のつながりも、ちょっとしたきっかけでそういった行動に移すこともできるし、また友人だけでなく、職場や御近所で広く周知を図って、声かけをして誘い合うことが大事かと思う。

まだコロナ禍ではあるが、少しずつ人との関わりや、つながりが前向きに捉えられつつあるので、シンプルだが、「つながる学びの実現」を求めていければ良いのではないかと考える。

【木村議長】普及員さんは大変かもしれないが、昔、地域の公民館とタイアップして開催していた「減塩味噌汁」の作り方教室のようなものは良い取り組みだと思う。

そろそろ、コロナだからダメ、という意識を切り替えて、公民館などを利用して、食文化でも良いし、健康維持のための献立でも良いし、地域に普及する動きにまた力を入れても良いのかと思う。

残念ながら、会議終了の時間となってしまったので、生涯スポーツについては、次回の会議で協議したいと思う。

＊「スポーツの振興」の協議は次回に送ることとなった。